大学院教育学研究科・教育学部

Graduate School of Education and Faculty of Education

教育は、子どもの現在と将来、社会の現在と未来に関わる営みです。それが歪んでいるなら、子どもの将来も社会の未来も危うくなります。そうならないためにも、豊かな教育を実現していくことは、私たちの重要な課題であり責務です。

教育がつくる日本の未来

世紀の転換点にあって、「子どもの問題」があらためてクローズアップされています。校内暴力、いじめ、不登校、学級崩壊、学力低下、援助交際などが、この二〇年ほど急速に問題化してきました。そして「一七歳の犯罪」。

一連の問題事象は、人間形成の基本が深いところで歪み始めているという印象を掻き立ててきました。その印象がそれほど重視する必要のないものなのか、それとも由々しき事態の予兆なのか、今のところ定かではありません。しかし、学校教育のあり方を含めて、現代の生育環境の歪みを問い直す契機となってきたことは確かです。

教育は、子どもの現在と将来、社会の現在と未来に関わる営みです。それが歪んでいるなら、子どもの将来も社会の未来も危うくなります。そうならないためにも、豊かな教育を実現していくことは、私たちの重要な課題であり責務です。

〈教育〉〈学習・成長〉に関する学際的・総合的研究

教育学は、そういう営みとしての教育を理論的・実証的に研究する学問です。およそ〈教育〉という言葉で想起されるあらゆる現象、子ども・人間の発達・成長や生活・学習に関わる諸現象を対象として、その形態・構造・メカニズムや機能・性質・意味を究明し、もって教育の実践・政策や社会生活の改善に資することを目的とする学問です。

その意味で、教育学は対象によって成り立つ学問であり、教育学に固有の方法があるわけではありません。人間形成を指針とし、哲学、歴史、社会学、経済学、文化人類学、心理学、行政学、生理学などの方法を駆使して、教育現象を解明しようとする学問なのです。

したがって、大学院教育学研究科のスタッフが手がけている研究も実に多彩です。たとえば、イギリスにおける体罰の歴史を一八六〇年の学校体罰史事件を手掛かりに思想史的に考察した研究、日本におけるしつけの歴史や青少年問題の展開に関する研究、学歴社会の生成・展開や学校教育と労働市場との関係に関する研究、文化的マイノリティの適応問題をアイデンティティ形成・**葛**藤という視点から解明しようとする研究、子どもの学習・発達のメカニズムや学力形成の問題に関する認知・学習・発達心理学的研究、青少年の心的障害・関係性障害やその解決への心理臨床的援助に関する研究、カリキュラム・教育方法・教師文化や学校文化に関する実践的・理論的研究、教育行財政やボランティア活動、身体のしくみや運動能力の形成に関する生理学的研究、体育・運動・スポーツの効能とあり方に関する研究、学力・心理・身体機能の測定や関連データの統計学的分析法の開発など、きわめて多岐にわたって多彩な研究が進められています。

大学院留学生や外国人研究員も多く、国際的な研究交流も盛んです。

変動社会における青少年問題（暴力・非行・いじめ等）に関する日米会議（1999年2月26日〜28日）
主催：大学院教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センター

大学院教育学研究科・教育学部の組織と目的

大学院教育学研究科・教育学部は、左表のような六コース・一附属センターを擁して、研究・教育活動を進めています。その主目的は、教員養成ではなく、教育文化の研究とその担い手の育成、及び教育研究者の養成にあります。なお、教育学部附属中等教育学校は、中高一貫教育の実践教育を進めていますが、双生児研究で世界的に誇れる貴重なデータを蓄積していることも特筆に値するでしょう。

藤田英典（ふじた・ひでのり　大学院教育学研究科長）

大学院（総合教育科学専攻）・学部（総合教育科学科）の構成

コース（大学院／学部）	教育研究分野
教育学／教育学	教育学理論、教育史（日本）、教育人間学、教育史（西欧）
比較教育社会学／比較教育社会学	教育社会学、比較教育システム論、高等教育論、比較教育学
教育心理学／教育心理学	学習心理学、発達臨床心理学、教授心理学、教育情報科学
学校教育開発学／学校教育学	学習開発学、教材開発学、教職開発学、授業開発学、学校臨床学
生涯教育計画／教育行政学	教育行政学、生涯学習論、社会教育学、図書館情報学
身体教育学／身体教育学	身体教育学、教育生理学、スポーツ科学、健康教育学
学校臨床総合教育研究センター（大学院附属研究センター）	いじめ、不登校、学力低下、情報教育など、様々の教育問題についてプロジェクト方式で学際的・実践的研究を行う。

海洋研究所

Ocean Research Institute

全国共同利用研究所として、研究船で世界の海にでかけ、地球表面積の70%を占める海洋にかんする自然科学を学際的、総合的に研究しています。国際共同研究が盛んで、大学院教育にも積極的に取り組んでいます。

海洋研究所は全国共同利用研究所として、昭和三七年に設置されました。海洋の物理過程、海流・気象の動態、物質循環、海底の地質構造・テクトニクス、海洋生物の生態学・生理学・生化学や水産資源の研究など、広範な海にかんする事象を、学際的、総合的に研究しています。本年度の改組により、六部門・一六分野となり、各分野には二名ずつの教授、助教授、助手が所属しています。

多くの国々を結ぶ海を対象にする海洋研究は、国内はもとより国際共同研究が基本です。本研究所は、海底下二〇〇〇メートルの試料を採取する国際深海掘削研究計画、海洋予報を実現する世界海洋観測システム、海洋生物資源の変動を研究する国際生態系研究、海洋の物質循環を研究する海洋フラックス計画などに、積極的にかかわっています。また、日本学術振興会の拠点大学方式による、インドネシア、タイ、マレーシアとの現地調査を含む共同研究とセミナーを実施しています。国際共同研究のために、海洋科学国際共同研究センターが平成六年に設置されています。さらに平成一二年には、海洋環境保全と海洋の利用開発を促進するため、海洋環境研究センターが設置されました。

海洋研究所の目玉はなんといっても研究船をもっていることで、船長をはじめとする乗組員も研究にかかせない存在です。太平洋の航海を主とする白鳳丸（三九九一トン）は、平成元年の建造時には世界一周も経験しています。昭和五七年に建造された淡青丸（六〇六トン）は、国内の港を起点にグアム島付近までの航海を担当しており、一一名の研究者が乗船します。

一方、昭和四八年に大**槌**に設置された臨海研究センターは、黒潮と親潮がはいりこむ地の利を得て、サケが産卵遡上する三陸海岸で、三隻の観測艇による標本の採取を行っています。毎年八〇にものぼる研究課題の遂行のため、一日あたり平均二〇人、のべ五〇〇〇人が研究に従事しています。

本研究所のもうひとつの重要な役割は、理学系研究科と農学生命科学研究科の協力講座としての大学院教育です。現在、四六名の修士課程の学生と五六名の博士課程の学生とともに、二四名のポストドクトラル・フェローと二二名の研究生が在籍しています。彼らも、指導教官とともに研究船に乗船します。

研究所のスタッフは海洋学の普及にも積極的で、本研究所が編集した『海洋のしくみ』（日本実業出版社）も好評です。本年七月二〇日の「海の日」の前後には、研究船と観測機器の公開と一般講演会の開催、横浜港での深海掘削船の公開、東京ビッグサイトで行われた「ゆめテク」ではブースを用いた各部門の紹介を行いました。

（ホームページ　http://www.ori.u-tokyo.ac.jp）
平啓介（たいら・けいすけ　海洋研究所長）

海洋研究所の部門と分野

海洋物理学部門 海洋大循環分野 海洋大気力学分野	海洋の流れや大気―海洋間の相互作用などの物理現象とその過程を、観測に基づき定量的に解明する。
海洋化学部門 海洋無機化学分野 生元素動態分野	海洋における生物および物質の特性を化学的手法により把握し、物質循環機構を解明する。
海洋底科学部門 海洋底地質学分野 海洋底地球物理学分野 海洋底テクトニクス分野	地質学、地球物理学、古海洋学などの手法を用い、海底堆積層や海洋地殻の形成と進化、プレートテクトニクス、地球内部の構造などの海洋底を解明する。
海洋生態系動態部門 浮遊生物分野 微生物分野 底生生物分野	海洋生態系における生物群集と海洋循環との関係から、生物群集の進化と適応、生態系の機構を解明する。
海洋生命科学部門 生理学分野 分子海洋科学分野 行動解析分野	海洋生物の成長・生殖・行動・環境適応などのメカニズムを、個体・器官・組織・細胞・分子のレベルで解明する。
海洋生物資源部門 環境動態分野 資源解析分野 資源生態分野	海洋生物資源の持続的利用と管理・保全のために、その生物学的特性と環境動態、さらに数量変動機構を解明する。

写真：
〈上〉研究船白鳳丸（3991トン）
〈中〉研究船淡青丸（606トン）
〈下〉附属大槌臨海研究センター